

びよんど

Beyond gender

2011.8 VOL.30

いつものように
わたしにできることを



特集 そのときわたしは、これからわたしは —— 東日本大震災 —— ……………2～5

体をほぐして頭と心をリフレッシュ・熱中症を防ぎましょう……………6
9月は水戸市男女平等参画推進月間です……………7 さんかくデータ……………8

男女共同参画都市宣言

美しい自然に恵まれ豊かな歴史を^{はぐ}育んできた、わたしたちのまち水戸
わたしたちは、水戸のまちをさらに輝きあふれる明日へとつなぐため、「平等・創造・平和」を基本理念とし、男女がともにわかちあい、ともにつくる社会の実現に向け、水戸市を「男女共同参画都市」とすることを宣言します。

- 1 わたしたちは、ともに一人ひとりが尊重しあい、平等のもとに生き生きと暮らせるまち水戸をつくります。
- 1 わたしたちは、ともに自らの意思で社会のあらゆる分野に参画し、次の世代へとつなぐ豊かでゆとりのあるまち水戸をつくります。
- 1 わたしたちは、ともに地球環境を守り、世界へ向けて、友情と平和の輪を広げるまち水戸をつくります。

平成8年4月1日

水戸市

特集

3.11

東日本大震災

そのときわたしは



これからわたしは

3月11日突然起こった東日本大震災。その時私たちは、何が出来たのでしょうか？そして今、水戸を以前のように復興させようという思いで、日々頑張っています。そこで今回は、さまざまな分野で活躍する3人の女性に、震災から今日までの話を聞いてみました。

消防官

荒金香織さん



荒金香織さんは、高校一年のときに救急車で運ばれ「そのときお世話になった救急救命士さんの対応に、とても安心して信頼できたので、将来は救急救命士になるう。」と決意したそうです。その夢がかなって、3年前に水戸市消防本部北消防署に入署。家族からは、「危険な職場だし24時間勤務の大変なところで働くことはない。」と反対されましたが、荒金さんの頑張りを見て、今では応援してくれているそうです。

3月11日、荒金さんは、いつも通りの24時間勤務の日でした。遅めの昼食をとり、通常業務に戻った直後に地震が起き「最初はあまり揺れていなかったし、ちよつと長いかなと思っただけでした。が、だんだん揺れが大きくなって庁舎の窓ガラスが割れ、これは大変なことになる。」と思っただけです。

地震がおさまるとすぐに救急要請の電話が鳴り始め、「地震の直後から午後

10時過ぎまで、消防署に戻って来られませんでした。途中、病院で炊き出しのごはんをもらったりして、翌朝まで現場に出勤していました。」現場から搬送先、そして次の現場へと、休む間もなく救護活動を行ったそうです。

道路が陥没等で封鎖されていたり、停電で信号機が動かなくなったりして道路は大渋滞、救急車が通常の数で進めなかつたため、現場へ到着するのに大幅に時間がかかったそうです。しかも、救急車からの携帯電話がつかえず搬送先の病院へ連絡がとれないという事態も起き、非常に緊迫感のある状況でしたが、消防署ではパニックなどなく通常どおりに業務を遂行したそうです。

「消防署職員は、普段から災害時の心がけができています。一般の方がめつたに遭遇することのない生死にかかわる現場にも、常に出勤していますので、(今回の大震災でも消防署職員は皆)冷静に対応できていたと思います。電話が通じないなどのハプニングもありましたが、そういった事態に対して『じゃあ、どうしたら良いのか』と、皆が考えて行動していました。」と振り返ります。

「助けを呼んでいる人がいるし、私たちがしっかりしないと市民の皆様が不安になってしまいます。」という使命感から、荒金さんも家族のことが心配になりましたが「自分のすべきことは何か、市民の安全を第一に考えました。」とのこと。

「あの日は結構寒かったので、暖房器具が使えなくて具合が悪くなったという人もかなりいらつしやいました。災害についてほとんどの人が実際に起きてみないと考えなかつたでしょうし、自分に

は起こらないと思っていた人が多かったと思いますが、日頃から準備をしておくことが大切です。」と、荒金さんは、家族との連絡手段や避難場所の確認、非常食やガソリンなどの物資の確保等、常に非常時のための準備が必要だと強調しています。

これからの復興についてたずねると「救急隊としての職務は、救急要請に迅速に対応し、救護活動に専念することです。このような通常の職務を遂行することが、地域全体の復旧・復興の一部分になり得ると考えています。」とお答えいただきました。

救急の現場に出てしまえば、業務に男女の区別はありませんが、「震災によりパニックを起こした救急要請者や周辺の人たちに安心を与えることができるのは、一般的に男性よりも穏やかで柔らかい物腰を持ち合わせた女性であると思います。そこで、私は、やさしく、ゆつくりと語りかけるように話すことで、普段より安心感を与えられるように努めました。」



また、震災以後、眠れない、不安で血圧が上がってしまったなどの精神的な不調での救急要請が増えているそうです。そういった方の不安を少しでも和らげるため、以前よりもお話を良く聞くように心がけているそうです。

「(テレビや映画などと違って)厳しいことばかりですが、すごく充実感のある仕事で、ずっと続けたい職業だと思っています。私がここまで頑張ってきたのは、職場の理解ある先輩方いろいろな気を使っていたり、暖かく見守ってもらえたからなので、とても感謝しています。消防署は男性の職場だと、女性が採用されると思っていない人が多いかもしれませんが、私のときは先輩に2人の女性職員がいましたので、無理だと思いませんでした。私も男性職員と同じように働いているというのがわかってもらえれば、もう少し増えるのかなと思います。」

荒金さんは以前に、職場見学に来た子どもたちから「お姉ちゃんみたいになりたい」と言われ、とても嬉しかったそうです。

「水戸が東北、福島に比べ被害が少なかったのは幸いですが、やはり見えないう心の部分で大きな被害を受けている市民の方も多いように感じるので、仕事を通じてふれ合える方々のお役に立ちたいと思います。」

荒金さんは、今日も市民の安心、安全を守るため、昼夜を問わず救急車で現場へ向かっています。

農業従事者

榎崎 ひろ子さん



水戸市の河和田町で梨を中心とした果樹園を経営しながら、水戸市農村生活研究グループ連絡協議会の役員をされている榎崎ひろ子さん。

震災当時はお孫さんと近くのショッピングセンターへ買い物に出かけていたそうです。

「段差のできた道を徐行しながら、車で帰宅すると、家の中は、たんすや書棚が倒れて散乱していました。孫と義母がいる場所を確保し、孫を嫁に引き渡して、暗くなる前にローソク、ラジオを準備し、家にあるもので食事を済ませ、その日はジツとしていました。」と当日のことをお話しして下さいました。

榎崎家は、那珂川からの水路が破損したため、田植えが10日ほど遅れたこと、屋根瓦が梨畑に落ち、木の枝が折れてしまったなどの被害がありました。が、「それだけで済んだのよ。」と明るく答えて下さいました。

農産物は、JAの直売所「つつこ

河和田」に出荷したり、月2回開催している黄門さん・青空マーケットに被災者支援として、チャリティで販売をしたりしたそうです。野菜や牛乳が出荷停止になった時は、消費者の方からの励ましがとても心強く、旧来の友人やNPOの活動を共にしている仲間にも助けられ、今でもその声援を、生産者の仲間にも届けるようにしているとのこと。

榎崎さんが所属している、水戸市農村生活研究グループ連絡協議会(以下協議会と略す)の仲間には、那珂川周辺の田畑の液状化や、涸沼川のそばで津波により建物が水に浸かり、地震で作業舎や機械倉庫が壊れ、再建にしばらくかかるという方もいて、会合の折にみんな頑張ろうと励ましあっても、どうしても話が進まなかったり、どうしようも話が進まなかったり、家が開けられないとかまた地震が来るのではないかと心配で、以前のような活動が出来ていません。」とおっしゃいます。

また農家は、家族経営ばかりでなく、海外から研修生を受入れているところもあり、経営規模を労働力に合わせて広げているので、今回の地震と、福島原発の放射線による不安で、研修生が帰国してしまうと労働力そのものの負担が大きくなり、地域活動に目をむけられないという現実があります。

榎崎さんは、今年度60歳を迎え茨城県女性農業士を退任されましたが、協議会の方は、生産者の一人として今でも活動されています。協議会は、生産者のグループで構成されており、2年ごとに持ち回りで代表を出しているそうです。「会

員の方は、人と人のつながりが大切なことは頭では分かっていますが、まだ自分の家のことで手一杯な人が多く、役員の受け手がなくて会の存続危機に直面しました。農村グループの仲間作りを若い世代にも広げて、女性農業士として今までやってきたことを次の世代に託そう。自分にあててもらった光を若い農業者へつなげていきたい。」という強い思いから、今年度会長職を引き受けたそうです。

今年の3月には、「多くの農業者にエールを送りたい」、「農業が、生産活動だけではなく、人の心の中にやさしく癒しや落ち着きまた時に厳しく自然と寄り添うすばらしい職業だと伝えたい」と思い、映画『アンダンテ〜稲の旋律〜』の上映会を企画しましたが、震災により、中止になってしまいました。しかし、九月にこの映画を上映出来る事になりました。「ぜひ、多くの方に見に来ていただきたい。水戸市の農村風景もその頃には稲穂が黄金色に色づいていると思います。多くの水戸市民がこの映画によって



(次ページへ続く)

市民力を高め、絆が取り戻せたら嬉しいです。」とおっしゃいます。

震災では、九州や福井、三重など全国の農村女性から支援があり、阪神淡路大震災を経験した仲間からも「一人じゃないよ、きっと元どおりになるよ!」と電話や見舞いの品を送っていただいたそうです。

「農家はその時々になさなくてはならない作業があります。春には芽が吹き、花が咲き、夏を経て秋には収穫と、仕事が続きます。だからよくよくせず、目の前の仕事をこなしながら、農家の思いを消費者に伝えることが大切だ。」とおっしゃいます。

それと農村の中でも、「水道が出ない」という話を聞き、「農家にはたいてい井戸があり、停電でもなんとか水には不自由しなくても済むと思っていたので、こういう緊急時には、『ご自由にお使いください』という自家水マップがあるといい」と感じたそうです。また一人暮らしの知り合いの多くは、余震の続く中、不安な日々を過ごしており、確かな情報を伝えることをしなくてはいけないとも思ったそうです。そこで、最近が高齢者でもGPS付の携帯や簡単携帯を持つ人も増えているので、「情報を出す、受け取る方法を賢く学ぼう」という講座も企画中だといいます。

最後に震災を経験して、感じたこととはという質問に、「水や空気が限りなくあると思っていた。しかし実際は、人類すべてが享受できるものとは限らないということです。もう一度原点に戻って、生き方の見直しをすることが必要ではな

いでしょうか。茨城県は、農業生産量も北海道の次に多く、米の生産が県内一という水戸市の農業が元気であつて欲しいです。これからも、食べてくれる人がいる限り、作り続けるのが農業者であり、作物が実る大地をいとおしく守り続けていくのが農村の心意気です。」とおっしゃいました。

ご自身としては、今まで農業士としてやってきたことを託すために、若い農業者の活動を支援し、今年一年会長職を全うしたいと、笑顔で答えて下さいました。

茨城放送アナウンサー

渡辺 美奈子さん



3月11日、パーソナリティを務める

番組の最中に震災にあつた茨城放送のアナウンサー渡辺美奈子さん。当日の様子を思い出しながら話して下さいました。

「3月11日は織田哲郎さんの誕生日で、織田哲郎特集をしていたんです。2時50分終了のコーナーなので、最後の曲をかけてしばらくしてから、揺れだしたなど

思つたんです。このスタジオの、ちょうどこの席でした。正直、地震の速報は何度も経験しているので、音を下げてもらつて、『只今、水戸地方では揺れを感じています。あわてず落ち着いて行動をして下さい。』と伝えました。普段であれば、揺れがおさまってくるのですが、だんだん激しくなってきました。音楽を流している状況ではないと判断し、音楽を止め揺れの状況を伝えました。天井からの吊りマイクはそんなに揺れるものではないのですが、なぜかブランコのように揺れだしたんです。真正面を向いてマイクを持ち、机をもう一方の手で握りながら話しました。そのうちに、目の端の方にあちこち物が飛ぶのが見えたんです。しかし、軸をずらしてはいけません。少しずつ前を向いて喋っていました。そのうち体も押さえられなくなってきました。脇には日本気象協会と直結しているモニターがあつて地震情報などは、これで得るのですが、一瞬にして飛んでしまいい情報が得られなくなってしまうました。最初の方の放送では、震度とかまったく言えていないのですよ。ここに、年に一度の訓練のときに読んでいた緊急災害時のマニュアルもありますが、それも一遍に吹き飛んで、マニュアルとか機械というものが全く役に立たないのだという状況の中で喋っていました。」

ただ事ではないという状況になった3時か3時半ごろに、もう一人の古瀬アナウンサーが入ってきてからは、二人体制となり、その後長時間に及ぶ、放送突入となつたそうです。

渡辺さんは、以前に民放ラジオ101社が集まって行う地震フォーラム

に参加した時、阪神淡路大震災の時のAM神戸の放送を聞いたことがあり、その女性アナウンサーの伝えなくてはという鬼気迫る放送が、今の自分の立場と重なりぐつと腹を決めて放送に臨んだと言います。

情報がなかなかつかめない状況の中、情報収集はどのように行つたのでしょうか。

「地震は日中に起こつたので、リポーターや、記者が外に出ているんです。記者は、災害用の報道携帯電話を持っていたので、外から中継を入れてくれました。県庁前の様子や、外がどれだけ被害を受けているのかの情報を入れてくれて、初めて私も外の状況が分かりました。リポーターは、FMカーという無線機を積んだ車に乗っていたので、放送無線で水戸駅前の状況を伝えてくれました。外の状況は、リポーターたちの様子で想像できたのですが、実感はわからないままふわふわと聞いていました。そうこうしているうちに、朝日新聞から直結しているネットですとか、日本気象協会さんの端末などからどんどん情報やデータの数字が上がってくるようになりました。自家発電でかろうじて電力が取れている部屋から上がってくる情報を、午後8時までひたすら読み上げました。」

放送を始めて3日ぐらいは、手ごたえのないまま、放送が続いていたそうです。3日目くらいに「放送ありがとうございませう。皆さん自身も被災者であるのに、情報を流してくれて大変助かっています。」というメールが一通届いて、ラジオ放送が皆さんに伝わっているという

実感が初めてできたと云います。激励のメールばかりでなく、はるかに多くの苦情のメールがあったと言いますが、その苦情があったからこそ放送をどんだん軌道修正出来たと振り返ります。また、避難所の入り口のいちばんいい所にラジオがあった、その周りにおじいちゃんたちが集まっている姿を見た時が、渡辺さんの中で一番の手ごたえとやりがいを感じた瞬間だったとおっしゃいました。それから、昼間は元気になるようなトーン、夜は、「大変な状況ですけれども、もしお休みになれるのでしたら少しでも休んでください。」という気持ちでやさしいぬくもりのあるトーンで、電気や水道などの市民の知りたい情報を取り入れていったそうです。

アナウンサーは、放送の前面に出ています。建物の中は、社員総力戦でそれぞれ持ち分というものが決まっていたそうです。「情報収集する側とか放送を送り出す側、食べ物を買出しにいく側、この社内状況を後々まで記録に残す側とか。私たちは最前線なので気がつかなかったのですけれども、ある時、社員が『卵売っていた』と言って、卵をたくさん買ったきたり、別の社員が『うちにあつた米を持ってきた』といって米を持ってきたりしたんです。ただそれを作る人は誰も決まっていなくて、手がすいた人がお米を炊き、卵をゆで、ということをやっていました。それは男女言っていられなくて、とにかく作れる人がご飯を作る。男の人も初めて握り飯を握ったり買物に行ったり、そのあたり男女関係なく、できることはいいなと思えました。やはり人間の本来の姿がそんなとき

には見えるなど。」そう感じたそうです。震災から一ヶ月たって、特別企画を行ったとき、渡辺さんは、茨城県の中でも復興の格差が生じていると感じたそうです。そんな時ラジオは、「強いものと弱いものどちらを向くべきか」と考えたときに弱い方のほうを向いているべきだと思ったそうです。「地元である茨城放送が、その声を紹介しなくて、誰がスポットを当てるのですかと。テレビなどのメディアで、マイクに向かって話せる人はまだいいですが、誰も話したくない、ボランティアの方に『ありがとう』と言うのさえ気がない。そういう人の声を私たちが吸い上げなければ、『じゃあ誰がこの人達に光を当てるのですか』という思いがあります。ですからラジオを通じての防災という意味で考えますと、決して弱い人を見捨てない。出来る限り、闇に沈んでしまいうるな、その人たちの声を吸い上げる。一方でいろんなお気持ちのそれぞれ被災された人、10万人いれば10万人の考え方がありますので、それぞれの人に寄り添うような気持ちで放送することを中心掛けて行きたいと思っています。ですから被災者の事情は各人各様で、決めつけることなく、その人の状況はどうなんだろうということを考えて、先入観をもたないよう心掛けておきます。」とその思いを述べて下さいました。

それは表面上であって、いろんな方に取材でマイクを向けたり、お話を伺うのですが、みなさん第一声は『うちはたいしたことはないです。』とおっしゃる。でもしばらく話をしていくと皆さん非常に色々なことを抱えていらつしやる。それを表に出さず明るくふるまっています。しゃるの本当にお強いなど。皆さん東北の方のことが頭にあつて、東北に比べたらうちはまだまだとおっしゃるのですけれども、客観的に考えたらみんなひどい状況なんです。だからそんなに我慢しないでくださいと思います。水戸っぽ気質じゃないんですけれども、耐えたりとか必死に忍んだりという事が根付いていらつしやるのかな。皆さんもつとわがままになっていいんじゃないですか。」とおっしゃいました。震災後、県内各地を歩きながら、たくさん声を聞いている渡辺さんの、茨城、水戸に対する思いがよく伝わってきました。

渡辺さんは、アウトドアで山歩きやダイビングやスキーが趣味で、自然の中に身を置く事がとても安らぐそうです。「自然って気がついたらこの人間の苦しみに関係なく、着実に移ろってゆく。大変なたくましさだなと思って、そういう日々景色や自然の移ろいとかを見るのがすごく落ち着きます。本当に早く何の気兼ねもなく山歩きをしたいですね。」とおっしゃいました。水戸のお勤めスポットとして、七ツ洞公園、大串貝塚、偕楽園をあげて下さいました。桜の下で昼寝をしたり、公園でサンドイッチ作って食べたりのそうです。ピクニックをするのに水戸は自然がすぐ近くにある最高だと言います。



今回の取材で、皆さんが共通して、「いつもと同じように自分がすべきことをした。」というお話がありました。日頃から「自分のすべきこと」を考えることの大切さを再認識いたしました。

体をほぐして、頭と心をリフレッシュ

今回の震災では、避難所生活を余儀なくされた方がおりました。保健センターでは、避難所をまわって健康観察や、リフレッシュ体操を指導したりしていただこうです。保健センター介護予防係野係長に、いつでもできる簡単リフレッシュの体操を教えてくださいました。

避難生活が長期に及ぶと、特に高齢者では、体を動かさないことによる心身の機能低下が懸念されます。

そこで、この度の東日本大震災により、避難所となった市民センター及び福島県から避難された方々が生活する「少年自然の家」において、心身の機能低下を予防する体操を実施しました。

体操の指導は、茨城県や水戸市が養成したシルバリーハビリ体操指導士に依頼しました。

この体操は、いつでも、どこでも、一人でもできるので、どなたでも取り組むことができます。特に足のむくみの解消や心身のリラックス効果があります。次の運動は、すべて椅子に腰掛けた姿勢で行います。

① 深呼吸
お腹に両手をおき、ゆっくり大きく深呼吸して、背筋を伸ばします。

② 首回し
目を開け、口を閉じたままゆっくり回します。

③ 背伸び

両手を組んで肘を伸ばし、ゆっくり両腕を頭上に上げます。次に手の平を頭上から頭の後ろに移動し、肘を開き、胸を反らし



④ 足指の体操

片方の足を反対側の足にのせます。足指を一本ずつ曲げたり反らしたりします。次に全部の足指をつかんで、曲げたり反らしたりします。続いて足首を回します。反対側も行います。



⑤ 足首の体操

片方の膝を伸ばした状態のまま、つま先を天井に向けたり床に向けたりするように足首を動かします。反対側も行います。



⑥ 腰ねじり

右足を上にして足を組みます。左手で右膝を押さえ、右手を後ろに回しながら上半身を右側にねじります。反対側も行います。



⑦ 足踏み

足踏みを行います。

熱中症を防ぎましょう

熱中症は七月から八月にかけて、気温や湿度が高い風通しが悪いなどの条件で多発します。屋外で活動している時だけでなく、家の中でも起きています。熱中症は生命にかかわる病気ですが、次のように正しい知識を持って対処すれば、予防することができます。

① 体調管理

- ・睡眠を十分取る
- ・三度の食事をしっかりと摂る
- ・過労や風邪などで体力がおちているときは、運動や外出を控える

② 環境調節

- ・扇風機やエアコンで温度調節する
- ・打ち水をする
- ・すだれ、緑のカーテンなどを設置する
- ・冷却グッズを活用する

③ 外出時の準備

- ・帽子や日傘を使用する
- ・吸汗速乾性の衣服を着用する
- ・白に近い色の服を着る
- ・外出時、時折涼しい木陰や冷房のある室内で休息する

④ 水分と塩分補給

- ・のどの渇きを感じなくても、こまめに水分補給をしましょう(コーヒーやビールなどは、水分補給に向きません)

※今年も、節電を意識しすぎて熱中症予防を忘れないようご注意ください。気温や湿度が高いときは、無理な節電をせず、適度に扇風機やエアコンを使用しましょう。

9月は水戸市男女平等 参画推進月間です

水戸市では、平成17年度より毎年9月を男女平等参画推進月間と定め、広く市民や事業者の皆さんの理解と関心を深めるための取組みをしています。推進月間では、男女平等参画社会づくり功労賞や標語・写真コンテスト入賞作品の表彰、市民団体と共催の事業を行ないます。

水戸市男女平等参画推進月間の標語が決まりました

たくさんのご応募ありがとうございました。選考の結果、最優秀作品1点、優秀作品2点、佳作3点が決まりました。最優秀作品となった榊原彩花さんの標語は、男女平等参画推進月間のポスターに掲載します。



最優秀作品

いつだって 男女が共に 助け合う

大場小学校6年 榊原 彩花さん

優秀作品

それぞれの 長所を合わせて よりよい社会

第二中学校1年 長久保千菜さん

育メンは イケメンよりも 素敵です

水戸市 益子 初美さん

佳 作

差別はノー！ 関係ないさ 仲間だもん！

梅が丘小学校5年 土井 遥香さん

お互いを 思いやる気持ちの 積み重ね

寿小学校5年 大久保仁尊さん

互いのよさを認め合い 男女のきずな 深めよう

城東小学校5年 照沼 陸人さん

● 男女平等参画映画祭

上映作品 アンダンテ ～稲の旋律～ (日本映画108分)
挫折からひきこもり生活を送るようになった主人公は、とあるきっかけで農業家の青年と交流を持つようになり、やがて・・・、農業や働く女性などをテーマにした感動の物語です。

日 時 9月4日(日)
①開場:午後1時30分 開演:午後2時
上映に先立ち男女平等参画推進月間セミナー(表彰式)を行います。
②開場:午後5時 開演:午後5時30分

会 場 内原中央公民館
参加料 300円
定 員 200名(先着順)
託 児 8月25日(木) 締切り
主 催 水戸女性会議

● 被災地を訪ねて…

ボランティアをとおしての現状報告

日 時 9月9日(金) 午後6時～8時
会 場 紅茶館(南町3-3-37)
参加料 1000円(軽食付)
定 員 30名(先着順)
託 児 9月1日(木) 締切り
主 催 みと男女平等参画を考える会

● 水戸っぼ魂を育てる!! 講座

「思いやる気持ちが社会を優しくする 一男(ひと)から女(ひと)へ・女(ひと)から男(ひと)へ」

日 時 9月11日(日) 午後1時30分～3時30分
会 場 みと文化交流プラザ 2階講習室
参加料 無料
定 員 30名(先着順)
託 児 9月1日(木) 締切り
主 催 特定非営利活動法人M・I・T・O・21

● みと考問塾2011

「一人ではない! 支えてくれた大きな力」

日 時 9月17日(土) 午前10時～正午
会 場 みと文化交流プラザ 2階講習室
参加料 無料
定 員 50名(先着順)
託 児 9月8日(木) 締切り
主 催 水戸女性フォーラム

● びよんど・カフェ

“3.11.あの日あの時あなたは?そして今…”

日 時 9月17日(土) 午後1時30分～3時30分
会 場 みと文化交流プラザ 2階講習室
参加料 無料
定 員 30名(先着順)
託 児 9月8日(木) 締切り
主 催 水戸の女性史をつくる会

● ワタシを磨くキャリアアップ講座

職場で自分の力を発揮するため、コミュニケーションやチームワークを学びます。

日 時 9月の水曜日(全4回)
午後6時30分～8時30分
会 場 みと文化交流プラザ 4階談話室
参加料 無料
対 象 働いている女性
定 員 25名(先着順)
託 児 8月27日(土) 締切り
主 催 男女平等参画課

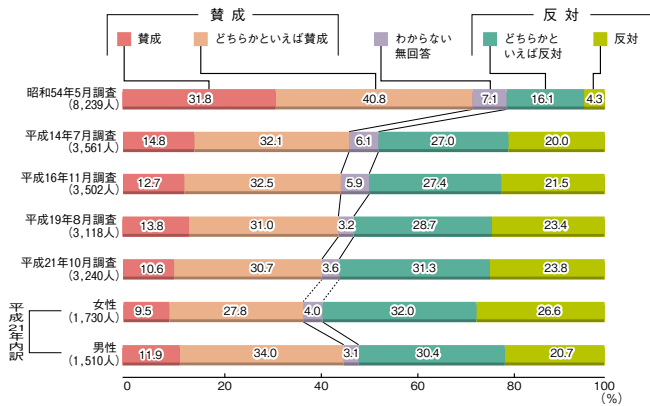
すべての事業で一時保育を実施します。(人数制限があります)
希望される方は、それぞれの託児申込締切日までに、託児料(1名200円)を添えて男女平等参画課へ
※キャリアアップ講座のみ800円(1名200円×4回分)

問合せ・申込み先

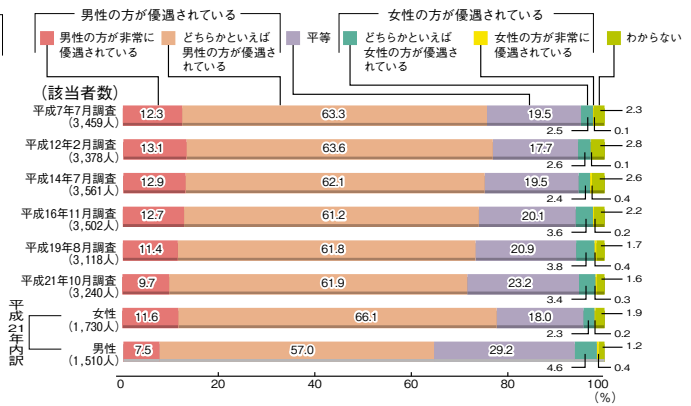
〒310-0063 水戸市五軒町1-2-12 みと文化交流プラザ4F
水戸市男女平等参画課
TEL 226-3161 FAX 226-3162

さんかくデータ

夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである



男女の地位の平等感



参考：両グラフともに内閣府「男女共同参画社会に関する世論調査」（平成21年10月）より作成。

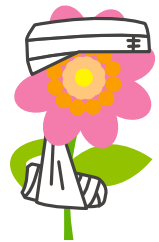
内閣府の「第3次男女共同参画基本計画」の中で、2020年までに社会のあらゆる分野において指導的地位に女性が占める割合を少なくとも30%程度にするという目標が示されています。内閣府の「男女共同参画社会に関する世論調査（平成21年10月）」の中の「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という調査では、昭和54年調査は賛成の割合が70%をこえていましたが、平成16年調査で、初めて反対が賛成を上回り、平成19年調査では反対が50%を超えました（52.1%）。男女別で見ても、平成21年調査で男性が、初めて反対が賛成を上回る結果となりました。また、社会全体でみた場合の「男女の地位の平等感」についても、71.6%が「男性の方が優遇されている」と考えています。また男女別で見ても、「男性の方が優遇されている」と回答した人は男性よりも女性の方が、多くなっています。このように、女性が社会に進出することが賛成とされながらも、各分野における「指導的地位」に占める女性の割合のグラフ（女性の政策・方針決定参画状況調べ2010年調査）からは、30%を超えている職業は薬剤師（67%）と、国の審議会等の委員（33.8%）だけとなっており、まだまだ現状値は、男性優位となっています。

*「指導的地位」の定義 ①議会議員、②法人・団体等における課長相当職以上の者、③専門的・技術的な職業のうち特に専門性が高い職業に従事する等

男女平等参画課からのお知らせ

このたびの東日本大震災では被災をされた皆様には心よりお見舞い申し上げます。昨年4月に、男女平等参画社会への、一層の推進を図るため、より拠点性の高い施設としてオープンした男女平等参画センター「びよんど」ですが、3月11日の東日本大震災で被害を受け、事務所を向か

い側の建物、「みと文化交流プラザ」の4階に移転しております。各事業につきましては、開催場所等を検討し、ただいま企画中です。皆様にはご不便、ご迷惑をおかけいたしますが、ご協力よろしくお願いいたします。



男女平等参画社会推進のために・・・

●男女平等参画推進委員会

男女平等参画社会の推進のために設置された、市民・事業者・学識経験者から構成される委員会です。総合的な施策と重要事項を調査審議します。

●男女平等参画苦情処理委員会

男女平等参画に関する苦情の申し出を、学識経験者から構成される委員会において公平・中立な立場から調査し、解決を図っていきます。

編集後記

今回の情報誌びよんどは、3月11日に起きた「東日本大震災」について避けて通る事が出来ないだろうと考えて、3人の方に震災当日のことや、これからのことについてインタビューさせていただきました。一人ではできないことも、みんなで一緒に頑張れば。そんな気持ちでこれからを過ごしてゆけたなら、復興してますますパワーアップした水戸市になれることと信じてやみません。私の家も早くジャッキアップしないと!! (Y)

発行日/平成23年8月

編集・発行/水戸市 市長公室 男女平等参画課
〒310-0063 水戸市五軒町1丁目2番12号
みと文化交流プラザ4F
TEL029-226-3161 FAX029-226-3162

ホームページ/ <http://www.city.mito.lg.jp>

印刷/佐藤印刷株式会社

